

ドイツ古典哲学が死んだ犬であるとするなら、自然哲学はその最たるものであろう。「自然哲学」という用語は科学史研究においてしばしば無意味で、科学の発展とは無縁な暗黒時代を指す言葉として用いられている。哲学における自然主義の隆盛においてはなおさら、道ばたのその哀れな遺骸が顧みられることもない。この点に関しては、近年生じているヘーゲル・ルネッサンス、あるいは「ドイツ観念論」ルネッサンスにおいてもその状況は変わらない。

このようにドイツ古典哲学の自然哲学、ないしはその自然概念が顧みられない理由は、その観念性と、それにとまなう生氣論的有機体論を拡張した自然観（とくに Schelling）にあると言っていいだろう。当に後者は現代正しいとされている自然科学的自然理解（物理的世界が基礎にあり、その上に化学的現象があり、生物はこれによって完全に理解はされないまでも少なくとも制約されている）と正反対のベクトルを示している。

本発表ではこうした背景を踏まえながら、ドイツ古典哲学における自然哲学をいわゆる「自然哲学」よりも広くとらえ、ヘーゲル『精神現象学』、『大論理学』を参照しながら、彼の哲学の観念論的プログラムから、生命が私たちの概念活動との関係でいかなるものとして捉えられているのかを論じる。その際軸におくのは規範という概念である。近年のアメリカを中心とするヘーゲル受容においてはいわゆる規範的解釈が影響力を持っているが、そこではむしろ自然は規範から自由な領域としておかれ、生命がその関係で論じられることもない（Brandom, McDowell）。それにたいし、それぞれ別のアプローチからではあるが、カンギレム、トンプソンはヘーゲルを参照しながら、生命の概念性と規範性を論じている。これらを踏まえながら、生命と概念をめぐるヘーゲルの思考を規範論的観点から再構成することで、ヘーゲルの観念論（それは同時に概念実在論でもある）的生命的理解を現在主流の自然主義に対して擁護することを試みる。